

フレンドシップ事業の大学生を迎えて

弘前市立中央公民館
館長 篠騎 珠樹

子どもの頃の記憶にあります。

「先生、1組では今度の日曜日に皆でサイクリングに行くんだって。

ぼく達も行きたい。」

「いいけど、誰か怪我したらどうなる?お母さん達から先生が叱られるんだよ。

それに自転車に乗れなかったり、持っていない子も居るかもしれないし」

私は成程と、その時は思いました。何故なら小学生の子どもにとって先生は、絶体の存在

でしたから。そして今、大人になった私は、先生のその姿勢は何か妙だな、と感じます。羽賀教授を前に大変恐縮ですが、高校生や大学生には批判する力が備わっているから、むしろ全人格的な教師像を子どもたちから突き付けられる小学校や幼稚園の先生のほうが一面において、より大変かなと思ったりもします。

以前こういう話を聞いたことがありました。

消費地まで運搬するのに効率的な方形のすいかを造ろうと四角い木箱にまだ未熟な実を入れて大きくし成功した人が、今度は円形の容器にまだ青く小さなすいかを押し込めて丸いすいかを造ろうとしたというのです。変な話ですよ。自身の力で自然に大きく生長して丸くなるのですから、まあ丸いすいかは、水を絶やさず肥料を十分与えてたつぷりと日光浴をさせてあげれば、作為などは必要とせずとも自然に出来上がるのでしょうか。

子どもだって水の代わりに食事、肥料に替えてに教育を与えそしてのびのびとさせたら、先天的に内在する自らの資質の力で曲がらず健やかに成長して、りっぱな良き社会人になるはずと考えます。

もうひとつ。

「大きくなったら何になりたい?」と尋ねられたとき、いまどきの子どもたちは「普通のサラリーマン。」とか中には「公務員。」や「教員。」と平気で答えたりするというのを聞いたことがあります。確かに普通のサラリーマンや公務員というのも立派な夢という意見は成り立ち得ますが、私には、子どもが自分のありったけの知識を動員したとしても身近かではないそれらの仕事の魅力を自身で感得したものとは考えられず、現実的な考えかたをする親の影や親の夢の代弁者としての子どもの卑屈な姿を感じてしまいます。そして子どもの夢がいつ頃から、かくも現実的になったのだらうと想うとき、哀しくなります。私の心は、それは「宇宙飛行士。」でもいいし、「サッカーの選手。」やら「バスの運転をする人。」でも良い、大人の目には取るに足らぬ他愛のないものにしか映らなくとも、その時点でのその子なりの精一杯の願望と、期待しているからです。そしてその答はいずれ加齢とともに変貌を遂げ、現実的な姿に引き降ろされるに決まっています。

そうならばそばに居る大人はその邪魔などすることなく、せめて、近い将来にその夢を捨てることになるまでの間くらいは、子どもにその子らしい夢を抱かせてあげたい。励まし

てやりたい。彼は、現実と折り合いを付けつつ成長の過程でその夢の実現の為に自分なりの努力をし、夢が妥協に取って替わっても、自身の意志で実社会の中に生きぬく何かをつかみ、たくましくつよい大人に育つのだと言うべきではないでしょうか。

さて、以上に縷々述べたことは、題名の意味するところから遠く外れ、さらに教育家たらんとする皆さんを前にして、失礼であったかも知れません。しかし、将来の皆さんの仕事上の伴侶となるであろう子どもとその教育ということについて、私が日々仕事をしつつ

考えたりすることどもを依頼に応じ、臆面もなく書き連ねてしまいました。

弘前市の公民館は、各ライフステージをそれぞれ心豊かに暮らしてもらうことを願い、その対象を少年、青年、成人、高齢者などに分けて設定して種々の活動を行っており、昨年皆さんが参加された『弘前市子ども会小学生・中学生研修会』は、その中の少年を対象として行なわれた事業でした。

フレンドシップ事業に参加して下さった大学生の皆さん、その節はお世話になりました。そしてありがとうございました。これまでの活動により訓練を受けた高校生リーダーに劣らぬ皆さんのバイタリティーには圧倒され、かつ感服しました。あすの教師を目指す皆さんの中にもなにかしら残るものがあったなら、幸いです。

皆さんは、どうぞ、りっぱではなくとも生徒にとってかけがえのない、良い先生になってください。期待しています。